一二　辭闕を辞す

獨不適時情　独時情に適せず
豈聽歡笑聲　豈歓笑の声を聴かむや
雪羞論戰略　羞を雪がむとして戰略を論ずれば
忘義唱和平　義を忘れて和平を唱う
秦檜多遺類　秦檜遺類多く
武公難再生　武公再生し難し
正邪今那定　正邪今那ぞ定まらむ
後世必知清　後世必ず清を知らむ

（口語訳）自分一人だけ時勢に合わず、意見が用いられなかった。どうして反対派の人々の歓び笑う声に耳を傾けてきいておれようか。いや聴くにたえない。武公岳飛が金に進攻された宋国の恥をそそぐ為防禦反撃の戦略を論ずると、正義を忘れて金と和平を唱えた売国奴の秦檜、その残党のような者共が多く、武公のような忠臣はもはや再び世に出にくくなった。このたびの朝鮮問題はどちらが正か邪か今どうして決まろうか。決められることではない。後の世の人々は必ずどちらが清く正しかったかを知るであろう。（明治六年（一八七三）十月の作。）

○辭闕＝官職を辞して朝廷を去り、帰郷すること。○秦檜＝南宋の権臣で進攻した金国と和を結び、忠臣岳飛を死に追いやり、祖国宋を滅亡させた。

○武公＝南宋の忠臣、岳飛のこと。進攻する金を破って功をたてたが、秦檜に讒言されて捕われ、獄死した。年三十九歳。岳飛はのち復権して鄂王・武穆の名がおくられ岳飛廟が建てられた。

（青）（全）（画）（薩）（庄）（隆）

二六　失題

柴門曲臂絶逢迎　柴門臂を曲げて逢迎を絶つ
夢幻利名何足爭　夢幻の利名何ぞ争うに足らむ
貧極良妻未言醜　貧極まって良妻未だ醜を言わず
時來牲犢應遭烹　時来らば牲犢応に烹に遭うべし
願遁山野畏天意　願わくは山野に遁れて天意を畏れ
飽易榮枯知世情　飽くまで栄枯を易えて世情を知らむ
世念已消諸念息　世念已に消えて諸念息み
烟霞泉石滿襟清　烟霞泉石襟に満ちて清し

（口語訳）粗末な狭い家にひじを曲げて寝起きし、客を迎えて応対する煩わしいこともさっぱりなくなった。夢まぼろしのようなはかない名誉利益など何で争い求める価値があろう。全くとるに足らないことだ。貧乏のどん底にあっても、順良な妻はまだ一度も貧乏が醜い、恥ずかしいと愚痴をこぼしたことはない。官に仕えて羽ぶりをきかしていても、いつか時が来ると犠牲の小牛同様煮られてしまうような目にきっとあうこともあろうから、願うことならどうか山野に身をのがれてかくれ住み、天意を畏れかしこみ、行いを慎み、栄枯盛衰それぞれの立場をかえ、よくよく十分に世の姿を知り尽くしたいものだ。そうすれば、名誉利欲を望むような世俗の心はもはや消えて、色々の邪悪な思いもなくなり、かすみや泉水庭石など自然の風物が思いのすべてを占めて、清々しい気分になるものである。

○柴門＝柴の戸。粗末な家をいう。○逢迎＝人の応対。○良妻＝よい妻。順良な妻。○牲犢＝犠牲の小牛。○烟霞泉石＝文字どおり解してよいが、自然のこと。

五二　奉送菅先生歸鄉

林疏葉盡轉傷悲
明發又爲千里離
細雨有情君善聽
替人連日滴淋漓

菅先生の帰郷を送り奉る

林疎らに葉尽きて転傷悲し
明発して又千里の離を為す
細雨情有り君善く聴け
人に替って連日滴って淋漓たり

（口語訳）木の葉がすっかり落ち、林がまばらで、秋はますます物悲しくなり、その上先生は明日旅立って千里も遠く離れてしまう。寂しいことだ。今降っている小雨には別れの情がこもっている。君よ、よく耳を傾けてきいてください。人に代って毎日降りつづけ、滴りあふれて涙のように流れていますよ。

○菅＝庄内藩中老菅實秀。権参事。号は臥牛。

（青）（全）（庄）（隆）